

Title	<書評>ナタリー＝フリーデン＝マルケヴィッチ著 『ベルクソンの哲学－無意識のストア主義の考察－』
Author(s)	鶴田, 博之
Citation	カルテシアーナ. 1984, 5, p. 25-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66899
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『書評』ナタリー・フリーデン「マルケヴィッチ著
『ベルクソンの哲学——無意識のストア主義の
考察——』

鶴田博之

原著の題目は Nathalie Frieden-Markévitch, *La Philosophie de Bergson. Aperçu sur un stoïcisme inconscient*, Editions Universitaires Fribourg Suisse, 1982 である。ベルクソンとストア主義という一見奇妙な取合せによって本書が目ざすのは、比較や影響の研究ではなく、「実在への基本的に似かよったアプローチを明らかにする試み」である。あらゆる実在の内の一つの調和、共通の活力と源を打ち建てることによって、それを生ける全体と見る一元論・ヴィタリズム・力動論がストア哲学の特性である。人間はまず世界を認識することによって自己を内部から認識し、発見された調和へと自らの行動を向けねばならない。こうして人間が世界から区別され得ないかぎり、論理学・自然学・倫理学もまた区別され得ないものとなる。そしてこの、現実を何よりもその運動性と一性の内で見る視座が時代を越えて影響もなく現れたとき、著者はこれを「無意識のストア主義」と呼ぶのであるが、本書はこの思考構造が「いかに人間にとって基本的なものであるか」を示そうとするのである。とりわけベルクソンは、ゼノンと同様に、拡大しつつある世界の中で社会的・政治的不安

の支配する時代にあつて自然との結合を提起し、人間を社会集団との断絶から救い出そうとした点において、ストア学徒なのである。

ベルクソンとストアとの類比が本書でも最も明白なのは、両者の原理についてである。エラン・ヴィタールが言うまでもなくスピリチュエルなものであるのに対し、ストアにとって活動するものはすべて物的である。したがってブネウマもまた物的なものであるが、これをアリストテレスの概念の物質と見るべきではない。世界を生成進化し発展するものとして見るストアの原理であるブネウマはすべての変化の原理であり、自らも動く原理である。両者の原理はエネルギー的存在、活動的で創造的な存在である。エラン・ヴィタールがすべての生の源であり、すべてを鼓舞するように、この「息」は物体に生気を吹き込む。この個性化の原理である生命の運動、求心の運動と共に、これに対する物質の運動、遠心的運動がそれぞれにあり、この対立の中間項をなすのが緊張であり、トノスである。緊張は倫理的な生活においては努力である。結果の中に原因以上のものを生む努力は、人間を高める因果性としてベルクソンにとって重要である。同様に、トノスは存在を一体化し、存在が無分別な行動へと分散するのを妨げる倫理的な努力である。ベルクソンにとってもストアにとっても緊張は物質と生命との媒介項であり、それなくしては生命の物質への適合が説明され得ない、世界の一元論的理論における中心的概念となるのである。

このような類比が、本書ではベルクソンの各主要著作について、その年代順に従ってなされている。それらの細部を追って煩雑な要約となることを避け、ここでまずベルクソン研究の立場から私評を加えておくならば、この比較研究は二つの成果をあげていると言えよう。その一つは、ベルクソン哲学をストア哲学の諸問題に突き合わせて考えることによって、その成長・発展を示すことができると思われることである。

一元論の問題がそれである。ストアのロゴスが唯物論と観念論とが交錯する要素を持つように、ベルクソンの一元論はその著作によって発展を遂げるのである。『意識に直接与えられたものに関する試論』が持続のみを實在とし、外界もまた私における持続とする点で、唯我論的で観念論的なモメントを示すのに対し、『物質と記憶』は事物の持続を主張する。そしてそれは一方では持続の程度の分析によって、一つの實在の物質性と精神性との中間項としての緊張の概念を設けるとともに、他方で新たに、世界と知覚(意識)との二元論の中で、一つの極である純粹知覚において世界と意識とが一致するという實在論的なモメントが現れる。これらはそれに続く著作で乗り越えられねばならぬモメントである。まず『創造的進化』は物質、精神とその両者の関係の発生を示すものである。物質は生命がその運動の中で自らを高めるための障害として自らに与えたものである。このとき知性が物質を捉えるのは、生命がこの自らの運動を知るために知性をも同時に産出したからに外ならない。こうして精神の無限という『試論』の

結論は新たに肯定される。そしてさらに『道徳と宗教の二源泉』では、自己のエランを伝えることで人間を相互に結びつける愛によって初めて示される、生命の本源的な一性が述べられるのである。これらの原理的な一元論に対して、前期二著作の一元論は方法として存するのだと著者は言う。

自由の概念もまた進歩するものであることが示される。『試論』において自発性の視点から捉えられた心理的な、すなわち個人の領域にとどまる自由は、『物質と記憶』の不決定性の分析によって普遍化されるという。意志の不決定性と物質の決定性との間に自由はすべての生物に程度の差をもって存することになり、かくして『創造的進化』において、他の諸實在に対する人間の優位は確定する。『二源泉』に至っては、人間はただそれだけでは自由とはならず、物質の抵抗を超える神秘家の飛躍が必要である。ともあれ、ベルクソンの自由は、全存在者の一つの原理に結びつける一元論的な要求の中で悪(物質)から独立するために源(ロゴス、エラン・ヴィタール)に依存するというパラドクスを含む点において、ストア的なのである。

さて、本書の比較研究の第二の成果は、ベルクソン哲学の全体と、論理学・認識論・自然学・倫理学の一貫した体系であるストアのそれとの類比によって、その体系的構造に光を当て得ることである。背景に一なる原理をもって、これを捉える認識が倫理的行為に直結する。著者はベルクソニスムをそうした人間中心的な哲学として捉えるのである。

本書は『笑い』等に見られる芸術論的断片の分析に一章を割いている。特殊な認識が問題となる。通常の認識では実在と我々との間に知性による覆いが介入するが、芸術的認識は、この習慣的な非人格性を取り壊して、対象と同時に我々自身を発見させる。ストアの世界がロゴスと物質との戦いであるように、ベルクソンにとって芸術は芸術家の運動の単一性とその表現の多数性という物質との妥協である。ロゴスに満ちた世界が美しいように、物質を忘れさせる作品が傑作である。こうして芸術家はその特殊な認識形式と教育者の性格によってストアの賢者に比せられる。ベルクソンとストアの共通点は、世界の中で人間の位置をあらゆる形式の認識の分析によって行なうことにあるとされる。

『創造的進化』では、宇宙に現前する精神的活力の認識が問題である。ストア学徒とベルクソンの両者にあつては、対象である生命とともにその認識の問題が平行的に取り扱われる。直観は実在の内部へ我々を入り込ませる一つの共感であり、共感であるが故に、我々にとって内的なものとの調和から生まれる。この意味で直観は、外的対象による魂の固有な内的緊張の変容であるストアの「概念的表象」に類似するとされる。そして、ベルクソンにあつて直観は、同一性を求める知性の利害的認識から区別される無差別的な認識として、対象の個性のみを捉えるものとなるが、この直観と知性との区別を、著者はストアによる二つのモラル——実は二つの認識を意味するとされる——すなわち賢者と一般人のモラルの区別にたとえている。

本書の概要を、その試みの成果であると思われる二つの観点から紹介してきたが、『二源泉』の分析こそが、それがベルクソンの最後の著作であり、倫理を正面から扱うものであるという二重の意味で、本書の結論的性格を持つてであろう。

ここでベルクソンは道徳と宗教との区別よりも静的なものと動的なものとの区別を重視する。運動性に基づくことによつてはじめて捉えられ得る新しい区別であるが、これに、他の著作に見られる二分法をそのまま対応させることは難しい。それは、本能と知性の社会的役割を考えると、これまでの物質と生命、知性と直観という区別とは趣を異にするのである。ここで著者は『二源泉』には三つの水準の分析があると考える。一つは知性以下の水準であり、本能、閉じた道徳、静的宗教のレベルである。第二は直観、神秘家、英雄の超知性的な水準であり、そして第三に、その両者の間に、たいていの人間が位置する、知性的な社会的道徳の水準が存する。一方は本能的傾向、他方は深い情動という、どちらも非理性的なものから生まれる、本来は全く異なる道徳を混合させるのは、閉じた道徳を正当化して社会的なものとしたり、開かれた道徳を表現したりする知性の働きである。著者はこの二つの道徳の混合した領域に、図式的な二元論の超克を捉えることを主張する。すなわち本性の異なる二つの道徳の間に、程度の差による連続性が存するわけである。ストアによる賢者と愚者との間にも中間的モラルが存在するように。ベルクソンとストアとが共に重視するのは現実の社会生活である。開かれた道徳が表面的

で社会的な自我からの脱却であるとはいえ、社会は聖人、英雄が避けるべき否定的なものではなく、逆に彼らは社会に帰り、他の人間を進歩へと鼓舞することによってのみ自己を表現し得るのである。

以上がベルクソンニスムとストア哲学との膨大な資料に基づく労作の概要である。本書は、ベルクソン自身にストア哲学への論及がほとんどないからには、哲学史研究の上での評価は期待できないものの、一元論的原理を背景に認識論と倫理学とが直結するという著者のベルクソン解釈が明示される点で、主張の一貫した著作と言えよう。

(博士課程学生)